

自由部門 学長賞「夏の嵐」

文学部日本文学科 3年2組 津 帆香

悲鳴を上げ続ける蝉。道端で干からびたミミズ。連日熱中症で亡くなる人のニュースが流れる中、私の祖母は涼しい病室で命を終えた。

三年の夏休み。集中講義から帰って来ると、祖母が救急車で運ばれ、緊急手術をして入院していると突然伝えられた。脳梗塞なのだと。また様子を見に行くから準備をしろと言われて、実感の湧かないまま私は車に乗り込んだ。

集中治療室では、父の兄の家族が先に来ていた。彼らに囲まれたベッドで、多くの管に繋がれた祖母の姿を目にした。手術をしたから、頭の半分だけ髪が剃られていた。意識は戻っていないらしい。管のせいで少し口を開けて眠っていて、間抜けだなあなんてぼつりと思った。

声を聞かせてあげて、手を握ってあげて。なんだかいろいろ言われたが、私は結局声を出すことも触れることもなく、なんとなく祖母の顔を傍で見て、なんとなく最初で最後のツーショットを自撮りのようにして撮ったくらいで、あとはむっつりと黙り込んで立っていただけだった。

祖母が倒れて二日目。血圧が少し下がったらしい。集中講義を終えた私はまた親に連れられて病院へ行き、下がった血圧を戻すための足のマッサージをした。無心でしていたから、親に言われるままやり続けてその日は帰った。

祖母が倒れて三日目。深夜に亡くなった。私や弟たちは家にいたが、祖母は自分の子供たちに看取られたのだという。特に苦しむこともなく、文字通り眠るように逝ったのだから、悪くない最期だったろうなと勝手に思った。

翌日にはもう通夜があった。祖母をより良く送り出すために、一家全員が祖母と同じ宗教に入ることになった。自分の数珠なんて初めて持ったなあと、貰ったばかりで手に馴染まないそれは、全て終わった今では興味も特にないのでそこら辺に放っている。なんて奴だと怒られそう。けれど私は、そこまで熱心に信仰する気はないので、私には私なりの付き合い方というものがある。後日、特に信仰する親戚から、自宗教に関する動画が送られてきたときは正直ぞっとした。自分で考えてできるので大丈夫ですと丁寧にお断りしておいた。

通夜当日、肝心の祖母は広間で棺桶に横たわっていた。しぶといこの人のことだから、実はただ眠っていて、突然目をカッと見開いて、がばっと起き上がるのではないかなんて思って、弟にそうおどけて言って見せたりした。その後じりじりと近付いて指先で触れた頬は異様に冷たかった。私はこの時初めて死体の冷たさを知ったのだ。

通夜を終えたと思った翌日の火葬では、祖母は献花に埋もれて蓋をされ、山の上にある

火葬場に連れて行かれた。

私は祖母が嫌いだ。あれをやれ、これをやれと口うるさい。一人でブツブツ言っていたと思ったら急に怒り出す。声を聞くだけでも神経を逆撫でされる。この人とは一生気が合わないだろうと思っていたし、向こうも向こうで、こんなに出来の悪い孫は初めてだ、なんて母に言っていたらしい。母にそんなことを直接言う祖母の神経には逆に感心する。そういう空気を読まないところも嫌いだった。

ただ、どんなに嫌いな人でも、その死に私は泣けるんだなあと思った。

とうとう火葬するという時になって一気にきた。ぶわりと涙が出て、声は出ないように唇を噛んでいた。火葬炉へ入ってゆく祖母を見ていた。お別れですと火葬場の人の声が聞こえた。お経を読み上げる声がホールに響く。扉が完全に閉まって、ごうごうと、その中から微かに聞こえ出した気がした。

そうして骨上げの時になって、熱気のこもる部屋の中で、私もその骨を拾い上げた。どこの骨だったかは覚えていない。やたらと長い骨上げ用の箸にちょっと手間取りながら、目の前のカラカラな、ちっぼけな白いものが祖母だなんて変な感じだった。骨壺に入れられた祖母を父が抱えて、密度のある五日間は終わった。

その後、週末は祖父の墓の元へ祖母を連れて九州へ帰った。墓を掃除して、一緒になれたねえと両親が骨壺を並べてふんわり笑っていた。

身近な人が亡くなったのも、葬式に出たのも初めてだった私は、この目まぐるしい数日間をなんとなくぼうっと、他人事のように過ごしていたと思う。泣きはしたが今でも実感があまりない。まあ元々嫌いだったというのもある。始終、機嫌悪く黙り込んでいたのはそのせいだ。けれど貴重な体験をさせてくれた意味では感謝している。

人の死というのは嵐のようだと思った。人が死んで嵐が生まれて、葬儀という暴風で揉みくちゃにされて、嵐が過ぎ去った後は晴れて日常が戻って来る。

私の日常は戻って来た。ただ、変わったことがいくつかある。あまりなかった親戚付き合いが増えた。祖母の使っていたベッドと車いす、歩行器が福祉の人に引き取られた。広くなった祖母の部屋に、ベッドの置いてあった位置に、よく猫が居座るようになった。両親が少し揉めていた時、祖母の使っていた椅子の足が突然根元から折れた。それと。

母を亡くした息子の涙を、私はまだ一度として見ていない。

<講評>

初めて人の死、近親者の葬儀に立ち会った心の動きを描いた本作は、死と現世との有り様を伝えて秀逸だった。テーマ、構成、文章力のいずれも申し分なく、かすかなユーモアも表れている。最後の日常の回復は死の本質を突いている。「嫌いだった」と断言する祖母の死に際して、親類家族や自身の感情を冷徹な視点で淡々と綴る。葬儀の最中、終始機嫌悪く黙りこんでいる著者の姿がありありと目に浮かぶ筆力に感嘆させられる。20代前半特有の御しきれない感情が的確に表現されており、読後感はずしも良いものではないが、秀逸なエッセイである。確かに、身近な人の死に触れて動き出す筆者の感情描写は、どこかニヒルで時に悪意を孕んでいるのだが、実は誰しも似たようなものであったりするから、読者もくすぐられるという面白さがある。しかし、この出来事が「死とは何か」「生きるとは何か」を問い返してきたとき、そこに深いテーマ性を与えることに成功している作品であると言える。総じて、祖母の死と葬儀と言うかなり暗い話題について、筆者なりのペーソスを利かせつつ若干のユーモアを加えた形で、自分の心情と心の動きについて細やかに語っている。人の心に生命と死と言うものについての何かを呼び起こさせるような文章構成になっている。

審査委員／吉目木晴彦、八木秀文、大庭由子、小倉有子、富岡治明（委員長）